

演劇評

正論や真実の追求は必要
 と思いたいが、時に家庭や
 職場の人間関係を悪化させ
 ることがある。安定した生
 活のため、目を瞑るべきな
 のか？

清流劇場が、イプセンの
 「野がも」を上演（11月16
 日、大阪市の一心寺シアタ
 ー倶楽で所見、田中孝弥構
 成・演出）。

グレーゲルス（高口真吾）
 が久しぶりに帰郷。旧友の
 ヤルマール（孫高宏）と再
 会するが、彼の妻が、父の
 昔の愛人・ギーナ（日永貴
 子）と知り、彼の娘（服部

桃子）が、実は父の子であ
 ると確信。理想主義者のグ
 レーゲルスは、ヤルマール
 にすべてを話し、真実を知
 った上で家族関係を再構築
 するよう諭す。だがヤルマ
 ールは現実を受け止められ
 ない。

舞台はヤルマール家の団
 欒の部屋。その前に無数の
 木片。頭上には青いネット。
 家庭が隠し事で覆われてい
 ることを想起させる。不安
 定な木片の上を歩く俳優。
 木片は「現実」を暗示する
 ように見える。

真実を追求した結果、娘
 の自殺という悲劇を迎え
 る。それでも自分は正しい
 と主張するグレーゲルス

正義か平穏か 命題問う



理想と現実のはざまで生きる人物らを
 高口真吾④らが好演—岡村 昌夫撮影

技。

俳優達が好演、各人
 物の価値観を活写。も
 し日常で出会ったら、
 否定したくなる人物像
 も、俯瞰して観察する
 ことができ、立場が理
 解できた。19世紀のノ
 ルウェーの作品を、現
 代の私たちを照射す
 る、リアルな舞台に仕
 上げた。

正義の追求か、平穏のた
 め虚偽にも目を瞑るのか。
 家庭に限らず、広く社会で
 直面することが多く、看過
 しがちな命題を普遍的に問
 い掛けた。

（大阪芸大短期大学部

教授 九鬼 葉子）

を、高口真吾は滑稽に造形。
 一方、過去を隠し、物事を
 深く考えず、日々の暮らし
 を懸命に生きるギーナを、
 日永貴子はしなやかに描
 写。愚かな面もあるが、こ
 の生き方も否定できないと
 思わせる、説得力のある演